

在日コリアンの生活文化研究

朴 浩烈

1. はじめに

本稿の研究対象は在日コリアンであり、その中でも戦前から日本に居住している人たち（在日コリアン・オールドカマー）であるが、日本で生まれ育った2, 3, 4世を被調査者としている。被調査者は朝鮮学校周辺コミュニティである⁽¹⁾。

最新の法務省発表による在日外国人統計（2016年12月末）によると、国籍・地域欄が韓国・朝鮮となっている人は485,557人であり、このうち特別永住者数は335,163人となっている。戦前から日本に居住する在日コリアンも、この統計からみると高齢化がうかがえる。また日本国籍への帰化と少子化によって在日コリアン・オールドカマーの総数（特別永住者）が減少していることがわかる。

在日コリアンもグローバル化、そして世代交代が進むにつれ、生活様式や生活文化も多様になってきていると考えられるが、本稿ではアンケート調査（2006年11月～2008年12月実施）を通して在日コリアンにおける生活文化の一面面を明らかにし分析しようと試みた研究である。アンケートに協力してくれたのは804人である⁽²⁾。聞き取り調査（83人）も行ったので適宜紹介する。

アンケートの質問は、①祭祀（チュエサ）を（おこなっている、おこなっていない

(1) このコミュニティに関しては朴浩烈（2016）「在日コリアンにおける言語アイデンティティと言語生活の諸相」一橋大学紀要『人文・自然研究』10号197頁を参照されたい。

(2) 群馬朝鮮初中級学校の中学生16人、東京朝鮮中高級学校の高校生124人（高校1年生26人、高校3年生98人）、朝鮮大学の大学生と大学院生348人（大学生329人、大学院生19人）、朝鮮学校教員91人（群馬朝鮮初中級学校14人、栃木朝鮮初中級学校8人、北海道朝鮮初中高級学校15人、千葉朝鮮初中級学校11人、東北朝鮮初中高級学校18人、東京朝鮮第3初級学校6人、東京朝鮮第4初中学校17人、朝鮮大学校2人）一般成人225人（群馬県41人、茨城県21人、宮城県2人、東京都87人、埼玉県2人、神奈川県19人、大阪府27人、兵庫県26人）である。

い)、②冠婚葬祭は(民族式、日本式、宗教含めたその他)を希望する、③日常的に朝鮮の食べ物(おかずなど)を(食す、食さない)、④自分と家族親族の結婚相手は(在日がいい、韓国人でもいい、日本人でもいい、その他でもいい)と、その理由の4つである⁽³⁾。

2. 祭祀(チェサ)について

ここではまず、アンケートの質問「祭祀(チェサ)を(おこなっている、おこなっていない)」の回答を見てみる。

祭祀を説明するとなれば、その歴史や意義(意味)そして祭床と順序などを広範囲にわたって説明しなければならないが、ここでは儒教でいう「孝」の思想のもと、祖先を敬い子々孫々の安寧を願うための伝統的儀式とする⁽⁴⁾。

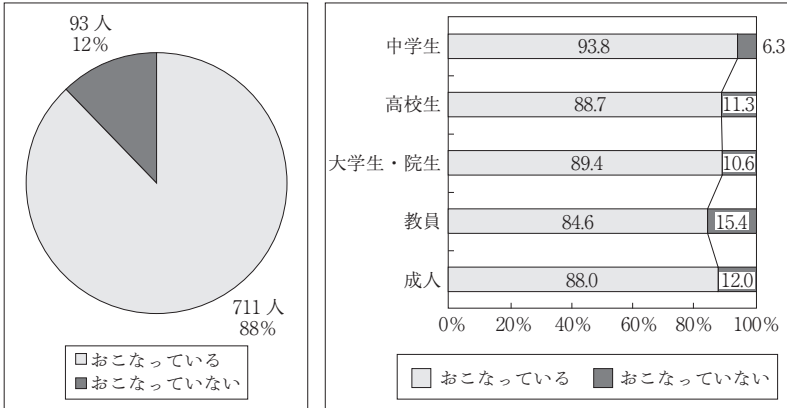
祭祀は朝鮮半島だけではなく、日本をはじめとする外国に居住する朝鮮半島出身者の家庭でも少なからず執り行われている。在日コリアンの場合、日本での長期生活と世代交代により、以前のように古式に則った祭礼遺習をできる限り忠実に踏襲するのではなく、時代と共に変遷過程を経ているといわれる。つまり祖先(各々の宗家、あるいは家庭)から引き継がれてきた祭祀を、そのままの内容と形式に従って行っているということではない。たとえば秋夕の祭祀は、家族親族が集まりやすい日時にする、あるいは正月も都合により陰暦にしたり陽暦にしたりする、お供え物は故人が生前好んだものをメインとする、宗家の主人から数えて2代までを祀る、などである。これらは現代化・簡素化といっても差支えない。

在日にとって出自民族との紐帯を重んじ、家族親族の結束を強めたもののひとつが祭祀であろう。祭祀は民族的アイデンティティの表出ともいえる。戦後70年以上が経過し、3、4世代がメインとなった朝鮮学校周辺コミュニティにおいて、全体の93%(図表1:円グラフ)が今も祭祀を行っているという調査結果は、その

(3) アンケート②、③は中学・高校生には行っていない。アンケート④は中学・高校生には「その他でもいい」という選択を削除して行った。

(4) 祭祀に関する書籍(写真・絵などが挿入されているもの含む)は、日本、韓国、北朝鮮にて数多く出版されている。たとえば成話会[編](1987)、民族文化研究所[編](1992)など。

図表1 「祭祀（チェサ）を（おこなっている、おこなっていない）」の結果データ



ことを雄弁に物語っているのではないだろうか⁽⁵⁾。もちろん朝鮮学校が反同化を掲げ民族性を重視する教育を半世紀以上行ってきたということを見逃してはならない。

先祖（曾祖父母・祖父母・父母）を追慕し、今日の自分たちを考えるとすることは、ある種の自己肯定であり、自己アイデンティティの確認作業ともいえる。

日進月歩の科学技術の発展とグローバル化、目まぐるしく変化する社会状況は、ともすれば面倒くさい「儀式」や「儀礼」を軽んずる方向に誘いかねない。古風は時代遅れといわれてもおかしくはない側面も内包する。しかし被調査者たちは現代社会において、このような古風な「儀式・儀礼」に自分に対する確認と、進むべき自我への道標じみたものを追い求めているのではないかも考えられる⁽⁶⁾。

一般的に世代交代が進むほど民族性を追い求める傾向は薄らぐと考えられるが、被調査者層においては「エスニック・リバイバル」現象も散見される。日本社会の一員としての在日、つまりエスニック・マイノリティであるという意識である。今後、オリジナリティに満ちた在日アイデンティティをどのように形作るのかなどは、

(5) 本稿では円グラフ、横棒グラフ、表を掲載しているが、便宜上すべて「図表」と表し、出現順に「図表1」のように番号を付けることとする。

(6) 原尻英樹（1989：154）は「彼らはこれ（祭祀の儀礼と宴）によって彼らが在日朝鮮人であることを強く確信できると考えられる。祭祀の儀式は参加する身近な親族と自らの民族性を分かち合う意味」としている。

日本と朝鮮半島との関係，日本国内における在日の社会的および法的地位などによって左右されるであろう。

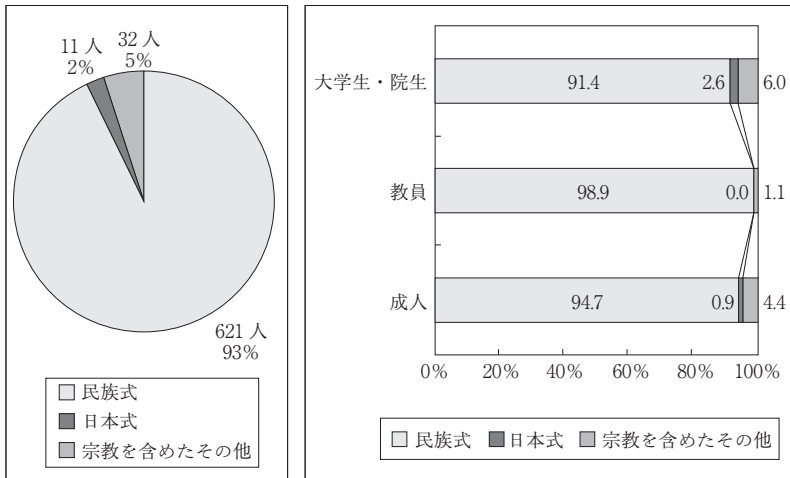
生越直樹（2005）も「チェサを行う」か，という調査をしている。結果だけを比較してみるならば，朝鮮学校周辺コミュニティのほうが，祭祀を行っている％が高いとなるということを付け加えておく⁽⁷⁾。

3. 冠婚葬祭について

ここではアンケートの質問「冠婚葬祭は（民族式，日本式，宗教含めたその他）を希望する」の結果を分析する。

調査結果は「民族式（93%）」が他を圧倒したことになった。ここで「民族式」

図表2 「冠婚葬祭は（民族式，日本式，宗教含めたその他）を希望する」の結果データ



(7) 生越は建国学校（子ども）を対象に調査をしているが，出生地別に①「全員日本」，②「親のみ祖国」，③「全員祖国」として区分けし，調査結果をまとめている。そのため，①はオールドカマー，③はニューカマーである。②はオールドカマーもいればニューカマーもいると考えられるが，基本的にニューカマーであると推測される。いずれの調査結果も朝鮮学校のほうが「チェサ（祭祀）」を行う％は高いとなる。

とは、どのようなものであるのかが問題となる。冠婚葬祭は、人々の人生（一生）において関わりをもつとされる行事である。冠婚葬祭を現代風に解釈するとなれば、成人式、婚礼、葬儀、祭祀となろう。被調査者コミュニティでは、これらにトルチャンチ（돌잔치：生後1歳の誕生日祝い）、還暦などを付け加えた各種儀式（行事）の総体と受け取られている。

ここでは婚約式や結納など婚礼にかかわる一切の儀式を省き、結婚式（披露宴含む）だけに焦点をあてて考察を行うこととする。選択肢の「民族式」を考える上で、朝鮮学校周辺コミュニティにておこなっている結婚式スタイルを取り上げる。

結婚式の一般的式順は、①開会宣言、②新郎・新婦入場⁽⁸⁾、③新郎新婦略歴紹介、④（結婚）宣言文朗読と署名、⑤成婚宣言、⑥記念品交換⁽⁹⁾、⑥主礼あいさつ、⑦祝辞、⑧謝辞、⑨祝杯、⑩閉会と新郎・新婦退場、となる。

結婚式は主礼（媒酌人）、司会者、テバン（付添い人）によって進行して行く⁽¹⁰⁾。その後、披露宴へと続く。披露宴の式順は、①新郎・新婦入場⁽¹¹⁾、②開会の辞、③食事と歓談、④祝電紹介、⑤祝辞と祝歌⁽¹²⁾、⑥新郎・新婦の歌、⑦花束贈呈、⑧閉会の辞、来賓の見送り、となる。

披露宴は、はじめから最後まで司会者が進行役である。結婚式と別の人がつとめる場合もあるがその場合、芸人（話術に長けた人、歌や楽器演奏に長けた人など）が披露宴の司会をつとめることが一般的である。

結婚式・披露宴はおもに結婚式場やホテルなどで行われる。そのため、料理は西洋式、中華式、和洋折衷などさまざまであるが、テーブルにはキムチ、朝鮮餅、煮豚、チジミ、ムクなど、飲み物には高麗人参酒や韓国焼酎などが振舞われるのが一

(8) 民族の古典衣装（男女とも）、あるいは結婚式用ドレス型チマ・チョゴリ（朝鮮半島固有の伝統衣装）を着るのが一般的である。

(9) 一般的には新郎からは指輪、新婦からは腕時計が贈られるといわれる。

(10) 結婚式は基本的に朝鮮語にて執り行われるが、最近では日本語での説明（司会）が加えられることがある。つまりバイリンガル結婚式。

(11) 結婚式とは違うチマ・チョゴリ（お色直し）を着るが、その後のお色直しがある場合、ウエディングドレスなども見受けられる。

(12) 新郎・新婦の同級生や職場の同僚、新郎・新婦の親の同級生、居住地域の在日コリアン、日本の友人や恩師などが司会者によって紹介され、祝辞と歌などが披露される。

一般的とのことである。このようなスタイルは、今日の韓国・北朝鮮の結婚式とは一線を画すものといえる。

朝鮮学校周辺コミュニティでの結婚式スタイルは、植民地時代から今日までの在日生活過程が「創りだしたもの（文化）」であると言える。ここでの「創りだしたもの（文化）」とは、意図的に創り上げたということではなく、慣例と異文化（日本と西洋）との接触によって定型化、システム化したものという意味であるが、朝鮮半島や日本の結婚式とは、異なる点が多々あるということによって、そして一般化しているという意味においてである。

朝鮮学校周辺コミュニティにおける結婚式・披露宴は、民族的なものを基調としながらも、日本という環境にマッチさせた在日式、それらが現代という時代感覚を取り入れながら完全形式化したオリジナルな結婚式・披露宴形態であると考えられる。数十年の歳月の間「添削」がなされ、作りだされ（創造）、一般化（固定化）したものであろう。

被調査者たちも、このような結婚式スタイルを念頭においているだけでなく、これを「民族式」と考えているが、これは一種の「コミュニティ文化」であろう。

船津衛／浅川達人（2006）によれば、「コミュニティ文化」はコミュニティの住民に共有されたものであり、ある程度、パターン化されたものである。そして信念、思想、知識、宗教、道徳、習慣、慣行、社会規範、法、芸術、文学、演劇、イベント、ファッション、建築様式などに表現され、世代を通じて継承されるという。これを基準に分析すると、被調査者コミュニティでの儀式としての結婚・披露宴は、習慣、慣行によりある程度、定型化されたイベントの一種であろう。もちろん各種チマ・チョゴリなどの結婚衣装は、「ファッション」でもある。しかし今後、世代を通じてどのように継承されるのかは未知数である。

「日本式」は、そのものずばり日本人がおこなっている結婚式スタイルであるが、日本人の結婚式も多様化しているので、どれを「日本式」と認識しているのかは定かではない⁽¹³⁾。しかし聞き取りによると、神前結婚を前提に回答している人たちも少なからず存在した。

「宗教を含めたその他」はおもに、教会における挙式を念頭においていると推測

(13) 洋装での神前結婚などもあるという。

されるが、最近の朝鮮学校周辺コミュニティにおいては、西洋式教会でも挙式をおこなう人が増えているといわれている。

興味深いこととして、教会での挙式でもチマ・チョゴリを着る新婦もいる、また教会で挙式をするからといって、新郎や新婦、あるいは家族親族の誰かがクリスチャンというわけでもないという（東京都在住 40 代女性）。宗教とは別に、ファッションスタイルとして教会を選んでいる人も存在するようである。

最近の韓国では、教会での結婚が一般的で、披露宴も在日とは明らかに違うという話を韓国に嫁いだ朝鮮学校卒業生から聞いたことがあるが、この話からも朝鮮学校周辺コミュニティにおける結婚式・披露宴スタイルが、オリジナルなものであると推測できる。

被調査者コミュニティの場合、結婚式（披露宴含む）の「民族式」を、ことば、衣装、食べ物、固定化した式順などをトータルとして考えている様子が伺える。

文化は変化・変容を伴うが、朝鮮学校周辺コミュニティにおける結婚式・披露宴は、日本という外的要因（地理的・社会的環境）と、在日自身による「内的要求（自分の出自文化を重んじながらも、現代社会（日本）の良いものを取り入れようとする意識と行動）」がもたらした結婚式・披露宴という、新たな視点によって考察すべき文化現象であるといえるのではないだろうか。したがって、決して政治的意図を持ったもの（文化）ではないと考えられる。ましてや「過去を参照することによって特徴づけられる形式化と儀礼化の過程（エリック・ホブズボウム／テレンス・レンジャー [編] (1997)」のこととしての「伝統の創造」ではない。

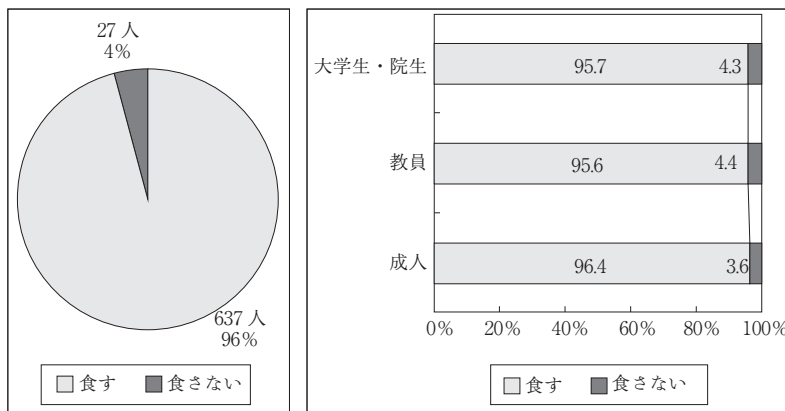
いずれにせよ、「在日式」であろうとなかろうと、被調査者たちが「民族式」であると考え、そのような文化（結婚式）を希望し慣行化しているということは、コミュニティ文化に伴うアイデンティティを形成している一要因でもあろう。

4. 食べ物について

「図表 3」から出自民族の食文化が日常の食生活と密接にかかわっていることが伺える。

聞き取り調査によると、普段自宅にて白菜や大根などのキムチ類はもちろんのこと、各種チゲ、ナムル、ムチュム、ポックム、朝鮮風スープなども食するという。そし

図表3 「日常的に朝鮮の食べ物（おかずなど）を（食す、食さない）」の結果データ



てチャンジャ、青唐辛子、サンチュ、豚足、牛スジ、ハチノス、太刀魚の煮付けなども食べるし、テチャン（ホルモン）などは、焼いても鍋でもつまみとして最高であるという意見も聞くことができた。

茨城県在住の女性（60代）によれば、昔から在日は、おにぎり（朝鮮語で卒姆咩）を握るとき、塩を入れた胡麻油を手のひらにまぶして握るが、これも「我々の文化」であると語っていた。埼玉県40代一般成人男性は、「私の妻は日本人だが、朝鮮（韓国）式料理を作ってくれるのでありがたい。辛いものなど、幼いころから慣れ親しんできた味は体が覚えているようだ」と語った。

在日コリアンは戦前から今日まで、日本各地にて焼肉・朝鮮（韓国）料理屋を営んできたことは周知の通りである。上野や川崎、大阪の鶴橋などは今も「コリアタウン」、「焼肉通り」などの名称で親しまれている。最近では、東京の新大久保などに代表されるような韓国飲食店が日本各地に多く見られるが、在日コリアン（オールドカマー）も韓国人（ニューカマー）も、お互いの良い所を取り入れながらビジネスを展開していると聞く⁽¹⁴⁾。

譚璐美／劉傑（2008）は、国共対立により複雑化した在日華僑に変化が訪れているという。またインタビューから新・老を克服しようとする華僑の心情が読み取

(14) 近年、排外主義的なヘイトスピーチによって韓国系の飲食店は激減しているとの報告もある。

れるが、在日コリアンの今後を展望する上でも参考になりえるのではないかと考えられる。在日コリアンも、日本と朝鮮半島、南北対立という政治に翻弄されてきた歴史を歩んできたからである。

在日2世の料理研究家で、子どもを朝鮮学校にて学ばせたジョン・キョンファ(1996)は「わが家の食卓にはいつもキムチがありました。日本に住んでいても食べ物や習慣は朝鮮そのもの…春一番のよもぎスープやふきのナムル、汗をかきながら食べるヤンニョムたっぷりのどじょう汁、芋づるの煮ものなど四季折々の祖国の料理…異国に生まれ育った私が自分の民族を愛し、誇りをもって生きてこられたのはとても幸せなことです」と書いているが、食生活や食文化から、自分たちのアイデンティティ問題を扱っている。

また植民地時代、先代が同胞たちに故郷の味を食べさせてあげたいとはじめた日本最初の冷麺店「元祖 平壤冷麺屋」(創業1939年、神戸)の店主(2代目)は、両親から受け継いだ民族の味を守り伝えることが朝鮮と日本を近づける方法、冷麺を多くの日本人に食べてもらうことによって朝鮮の風習、文化をもっと理解してもらう、この味を伝承していくことの意味は、朝鮮民族の誇りを引き継いでいくことであると語っている(雑誌「イオ」2009年2月号)。

マイノリティにおけるアイデンティティと関連がある研究としては、パリに住む日本人のアイデンティティを扱った岩崎久美子(2007)、ハワイに住むジャパニーズのエスニシティ(アイデンティティも含む)を扱った森仁志(2008)、おもに外国人労働者や在日コリアンなど、日本におけるマイノリティのアイデンティティ・市民権・多文化教育などを幅広く扱った梶田孝道[編著](2001)、在日華僑を扱った過放(1999)などがある。

マイノリティであるとは断言出来ないが、複雑な台湾外省人のアイデンティティを扱った研究としてステファン・コルキュフ(2008)もある。そして「海外コリアン」を正面から扱った著書としては、川崎市に住む在日コリアンに焦点を当てた金命貞(2007)、海外居住(日本、米国、中国、中央アジア)コリアンを包括的に扱った高全恵星「監修」/柏崎千佳子[訳](2007)、在日コリアン1世52人を選び、聴き取り調査をまとめた小熊英二/姜尚中[編](2008)などがある。

これら一連の著書は、マクロ的に捉えたコミュニティや集団にとってだけでなく、ミクロ的な視点で捉えた人間個人々人にとっても、アイデンティティの裾野は大変広

ということを示唆しているのではないかと筆者は分析している。

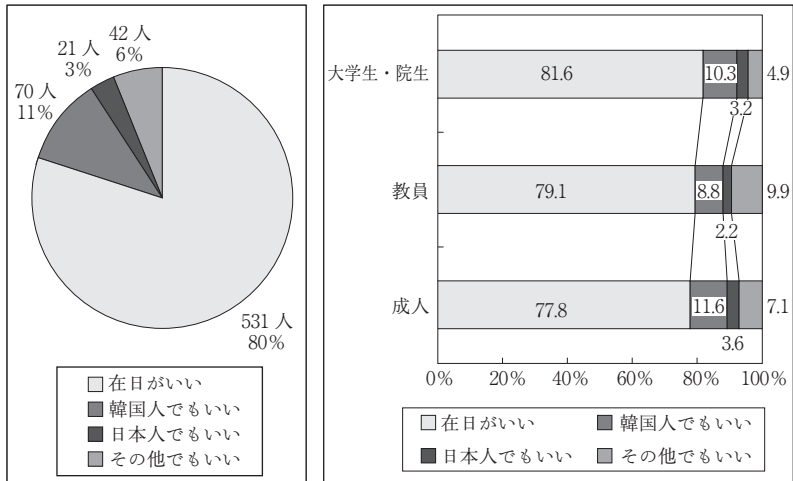
5. 結婚相手について

被調査者コミュニティにおいては、在日同士の結婚を奨励してきた歴史がある。日本人への同化や社会的ステレオタイプによる在日コンプレックスによってもたらされる萎縮ではなく、日本に住んでいる朝鮮人としての自覚を涵養し、堂々と生活するための民族教育を行うことを目的とした朝鮮学校教育の影響も大きい、このようなことなどが、同胞同士の結婚を奨励するというコミュニティ・アイデンティティを作り上げ、定着させてきた。

在日とは境遇も法的地位も違う中国朝鮮族の若者の場合も、結婚相手としては、できるだけ同じ朝鮮民族を選ぶように親から薦められるという（金股鉄 1998）。このような傾向は、海外に居住する朝鮮民族の共通した結婚観なのかはわからないが、同じ民族同士の結婚を否定することは少ないのではないかと考えられる。

しかし、最近実施された中国朝鮮族女子大生の結婚観アンケート（黒龍江新聞電子版 2009年7月17日）によると、朝鮮族が良いは48%、残り52%は「人柄が

図表4 「自分と家族親族の結婚相手は（在日がいい、韓国人でもいい、日本人でもいい、その他でもいい）」の結果データ



良くて能力があり経済力があれば、どんな民族でも関係ない」と答えたという。経済力重視とグローバル化が影響しているのであろう。

在日同胞婚姻統計（『人権と生活』2007年24号）によると、同胞同士の婚姻率（人数で計算）は、1960年79.29%、1970年72.32%、1980年59.65%、1990年27.30%、2000年20.61%と減少傾向にあるが、朝鮮学校周辺コミュニティにおける同胞同士の婚姻率は、他の在日コリアンよりも相対的にパーセンテージが高いといわれている。

同胞結婚相談所が未婚男女を対象（男性318人、女性265人）にアンケート調査を実施した結果が雑誌『イオ』2005年4月号に掲載された。調査の結果は、同胞同士の結婚を希望している在日未婚男女が圧倒的に多いということである⁽¹⁵⁾。

図表5 中・高生への質問「自分と家族親族の結婚相手は（在日がいい、韓国人でもいい、日本人でもいい）」の結果データ

	在日がいい	韓国人でもいい	日本人でもいい	無回答
中学生（16人）	14人（87.5%）	0人（0%）	2人（12.5%）	0人（0%）
高校生（124人）	86人（62.8%）	17人（12.4%）	32人（23.3%）	2人（1.5%）

（高校生の場合、複数回答があったため、回答総数137を100%としての回答%計算）

筆者が行った今回のアンケート調査は、この質問に限って考えるならば最新のデータであると同時に、中学生、高校生、大学生・院生、教員、成人と対象を分けし、幅広く扱ったことよって、被調査者コミュニティにおける全体像を把握できるというところに特徴があるといえる。総調査者数804人（未婚者・既婚者）ということも、同胞結婚相談所の583人（未婚者のみ）と比較すると違いがある調査である。

なお結果は、「中学・高校生」と「その他」に分けて公表している。中学・高校生の場合、教育的配慮（年齢・心理的な問題、質問の複雑化回避）などから、回答選択肢のひとつ「その他でもいい」を取り除いて実施したためである。

(15) 質問は「結婚しようと思う相手は同胞？ それとも日本の方？」であり、選択肢は①「必ず」、②「できれば」、③「日本の方でもかまわない」、④「どちらでもかまわない」。87%が①と②回答者であったという結果が公表された。よって筆者の質問もこのような結果を前提に選択肢を設定した。

結果（「図表4の円グラフ」）は、「在日がいい」という回答（80%）が他の回答を圧倒した形となった。結婚相手の希望としては1番在日（80%）、2番韓国人（11%）、3番日本人を含むその他（9%）となった。

「図表5」を見ると希望結婚相手としては、1番在日、2番日本人、3番韓国人となったので、「図表4」とは2番と3番が入れ替わったことになる。しかし中高生の場合、結婚問題を身近に感じながら考えているのか、韓国人や日本人との接触と付き合いがどのくらいあるかという疑問が浮上するので、あくまでも結婚相手としては身近な在日を希望しているということだけを重視しても差し支えないのではないだろうか。

次に、回答別に記入された「理由」の中から、代表例だと思われるものを紹介した後、分析してみたい。

A：在日がいい

「同じ在日のほうが理解しやすい」中学男性

「自分が在日だから」中学男性

「同じような環境で育ったので、同じような考えを持っていると思うから」中学女性

「在日同胞社会で生活してきたし、今後もだから」高校男性

「子どもを朝鮮学校に通わせたいから」高校女性

「子どもの将来を考えると」高校女性

「（その他とは）価値観、歴史認識が少し違う感じがする」高校女性

「韓国人とは生活感覚がちょっと違うし、日本人はそれプラス民族が違うので」高校女性

「あえて国際結婚を望む必要がない」大学男性

「（在日は）ことばでは表現できない特徴がある」大学男性

「日本にてたくさんの在日同胞が活躍し、住みやすい社会を実現するため」大学男性

「（在日同士の結婚は）当然という考え」大学女性

「共有するものが多い」大学女性

「衝突する要素が少ないから、感覚的に」院生女性

「民族結婚が当たり前という感覚」教員女性 20 代

「一生を共に過ごすので生活様式が似た人がいい」教員女性 20 代

「現時点にて在日社会の分裂・消滅を促がすようなことは奨励できない」成人男性 30 代

「朝鮮学校卒業生同士は価値観，社会認識，感情などにて共通点がある」成人男性 30 代

「育った環境・風習・習慣などの共通性」成人男性 40 代

「社会歴史的境遇の共通性のため」成人男性 50 代

「(日本で) 民族性を維持するため」成人女性 30 代

B：韓国人でもいい

「朝鮮人ならいい」高校女性

「同じ民族同士のほうが，心が通じ合うのでは」高校女性

「在日同胞同士の結婚が理想だと思うが，結婚問題はどうしようもないと思う」
大学女性

「在日 1 番，韓国 2 番，その他は難しい」成人男性 20 代

「食生活，言語が同じだし，在日の多くは故郷（本籍）が韓国だから」成人男性 40 代

「民族性を重んじたい」成人女性 30 代

C：日本人でもいい

「自分を理解してくれる人なら」中学男性

「好きになった人なら誰でもかまわない」中学男性

「個人の自由は尊重されるべき」高校男性

「日本人と結婚したとしても，自分は日本人にはなれない」高校女性

「国籍は関係ない」高校女性と成人男性 30 代

「心が大事」成人女性 20 代

「幸せは対象別ではなく，相手（人間）自体による，本人の意思次第」成人女性 60 代

D：その他でもいい

「国籍よりも愛せるのが重要」大学男性

「意思疎通が十分できればよい」成人男性 40 代

「違う民族であってもお互いが尊重しあえるのであればいい」教員女性 20 代

「望めばきりがいい」教員男性 20 代

「当事者の意識水準と経済状況により結婚相手の要求は大きく変わる」成人男性
30 代

アンケートに書かれた各々の「理由」は、あえて分析を加える必要がないくらい、明瞭かつ率直な意見（主張）である。「在日同士がいい」という回答者の「理由」は 21 人分だけ紹介したが、在日朝鮮人であるというアイデンティティと自己主張、それに伴う絆や境界までも表現している。結婚は本人だけではなく、家族親族間の結びつきでもある。家族親族を含めた「われわれ意識」の結束を求める生活感情が表出されていると分析できる。

一般的にエスニシティ考察において、「我と彼」の境界を議題とする傾向があるが、たとえばトーマス・H・エリクセン（2006）は「エスニシティに関する最初の事実は、ウチとソト、すなわち我が彼の体系的区別をつけることである／エスニシティは、自分たちが文化的に独自だと見なしている成員から成る諸集団の間に存在する、制度化された関係性を前提にしている」と述べている。また婚姻の問題に関しては、個人よりも大きな集団として行動することも指摘している。

今回の結婚相手に関する調査結果を見ると、被調査者の場合、マジョリティ集団である日本人だけではなく、同じ民族であると認識している韓国人でさえも、「在日がいい」と比べると低い数値を表している。このことは被調査者たちが、民族に対する帰属意識とは別の次元にて、在日自身が在日を捉えていると考えられる。

先ほどのエリクセンのことはを借りながら被調査者たちを考えるとすれば、以下のように分析することもできるのではないだろうか。

- a) 多くの在日（被調査者）は生活、及び文化的に独自であると考えている。
- b) 在日は諸集団（マジョリティ集団・民族集団）とは異なる比較的強い関係性、もしくは意識構造を持っている集団である。

c) 婚姻の問題に関しては、在日という集団として自己規定する傾向がある。

そしてこの a), b), c) から在日は在日を「我（ウチ）」、その他を「彼（ソト）」として捉える傾向があるということはこのアンケート調査結果から導きだせる。そして同民族（韓国人）は「我（ウチ）」であるとも考えられる余地はあるが、仮に韓国人が「彼（ソト）」の範疇に属するとすれば「彼（ソト）」にも、同民族か否かという境界意識が少なからず存在するといえる。

しかし、あくまでも「傾向」として捉えるべきであろう。そのことは「B：韓国人でもいい」、「C：日本人でもいい」、「D：その他でもいい」の理由に書かれた被調査者たちの考えを見れば一目瞭然である。

長年の「在日」という環境と生活は、多方面にわたり多様性を育んできたとも考えられるが、結婚相手として「在日がいい」の回答を「保守的である」と一面的に捉えることには慎重さが求められよう。個人と集団意識は歩んできた歴史、及び社会環境と切り離すことができないばかりか、マイノリティ社会における自己規定は、マジョリティ社会との関係性を無視して評価することができないと考えられるからである。

一方、理想と現実のギャップも認められる。厚生労働省大臣官房統計情報部編『人口動態統計』（2017年4月）によると在日コリアンの婚姻統計は以下のようになる。

図表6 在日の婚姻統計

	在日同士 (件数)	在日同士 (人数)	男：在日 女：日本	男：日本 女：在日	在日と日 本の件数	在日とそ の他の件 数	在日同士 率（人数 で計算）
2015年	398	796	1,566	2,268	3,834	164	16.60%

（ここでの「在日」は「特別永住者証明書」および「在留カード」上の「国籍・地域」欄が「韓国」もしくは「朝鮮」表示の者を指す。「日本」は国籍が日本の者を指す）

また在日コリアンの離婚統計は以下のようになる。

図表7：在日の離婚統計

	在日同士 (件数)	在日同士 (人数)	男：在日 女：日本 (件数)	男：日本 女：在日 (件数)	在日と日 本の離婚 件数	在日とそ の他の件 数	日本人同 士の件数
2025年	139	278	791	1,450	2,241	71	212,540

今後とも在日における婚姻関連調査を継続することによって、断片的かもしれないが、エスニック・アイデンティティの変化・変容をもうかがい知ることができるであろう。

6. おわりに

本稿「5」で扱った「自分と家族親族の結婚相手は（在日がいい、韓国人でもいい、日本人でもいい、その他でもいい）」のアンケート質問は、結婚相談所にて類似的な調査を行っているが、それを除けばおそらく被調査者コミュニティにおける初めての本格的調査であろう。今まで明らかにされなかった事実・実態を公表・分析したことになる。

数量的統計もさることながら、被調査者の「生の声（アンケートへの記述、聴き取り）」を幅広く拾えたこと、それにより彼ら彼女らの思い（主張）や考え方（アイデンティティ）までも言語化（公表）できたことの意義は、決して小さいものではないと考えられる。

在日コリアンを構成するひとつである朝鮮学校周辺コミュニティの生活感情や文化的特徴を共時的に明らかにしたが、朝鮮半島の南北、そして日本との共通点や違いも確認できた。たとえば結婚式などは、日本と朝鮮半島（南と北）の文化が融合された文化であると考えられるし、近代と現代が織り成した産物であるとも考えられよう。これらを端的に表現するならば「混成文化」であると分析できるが、このような文化的特徴を含有するようになった要因（環境）こそ、ポストコロニアル状況である。

在日コリアンの同胞法律・生活センター（東京・上野）が2008年における1年間の相談内容と件数を集計したところ、1番多かった相談案件としては相続、2番は戸籍、3番は離婚、4番は金銭トラブル、その後、障害年金、年金、福祉問題となったという。本稿にて結婚に関するアンケート調査も行ったが、離婚相談が3番目に多かった相談となっているのも現実である。

ここで、調査年度は違うが、在日コリアンと群馬県太田市における外国人相談の内容（2004年度）を比較してみよう（太田市は全人口の約4%にあたる約9000人が外国人住民であるが、その多くが日系ブラジル人であると推測される）。

図表8 在日コリアンと太田市の外国人の相談内容比較

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位
在日コリアン	相続関係	戸籍関係	離婚問題	金銭トラブル	障害年金問題	年金関係	福祉関係
太田市の外国人	在留資格等	税金関係	住宅関係	保険年金関係	日常関係	保育園関係	教育関係

*太田市の在日外国人相談内容（統計）に関しては河原俊昭／他【編著】（2007）を参照した。

相談内容を比較すると、一般の在日外国人と在日コリアンの間には違いがはっきり読み取れるが、居住年数、在留資格（永住権の有無など）などが深くかかわっていると見えよう。在日コリアンの相談内容は外国人相談というよりも、一般の日本人の相談内容に近いと思われる。

しかし、実はこの在日コリアン相談案件の上位1番、2番、3番、そして年金の相談などには、ポストコロナルな在日像が映し出されている。被調査者のほとんどが今日の韓国の地出身者とその子孫である（いわゆる在日コリアン・オールドカマー）。オールドカマー（被調査者含む）は、これらの相談において、在日だけではなく韓国・韓国人、そして日本・日本人も絡むだけでなく北朝鮮も絡む場合があるので複雑化する傾向があるという（例えば「韓国」への国籍変更やニューカマーとの結婚における家族関係登録簿の整理問題、離婚手続き上における日韓の違い、在日無年金問題など）。

ソシュール（1993）は「観点に先立って対象が存在するのではさらさらなくて、いわば観点が対象を作りだす」ということばを残しているが、さしあたり筆者なりの観点に立って研究対象とテーマを設定し、在日コリアンの生活文化を研究したことになる。マイノリティの生活文化や生活感情は表に現れにくいのが、在日コリアンの生活文化に関する一次資料としてのデータ化（図表化）、表出した生活感情の言語化、それらに分析を加えたのが、本論文である。

This work was supported by the Core University Program for Korean Studies through the Ministry of Education of the Republic of Korea and Korean Studies Promotion Service of the Academy of Korean Studies (AKS-2016-OLU-2250001).

参考文献

- 成話会〔編〕(1987)『目で見る韓国の産礼・婚礼・還暦・祭祀』国書刊行会
- 民族文化研究所〔編〕(1992)『同胞家庭禮節』朝鮮新報社
- 原尻秀樹(1989年)『在日朝鮮人の生活世界』弘文堂
- 生越直樹(2005)「在日コリアンの言語使用意識」真田信治/他〔編〕(2005)所収
真田信治/他〔編〕(2005)『在日コリアンの言語相』和泉書院
- 船津衛/浅川達人(2006)『現代コミュニティ論』(財)放送大学教育振興会
- エリック・ホブズボウム/テレンス・レンジャー〔編〕(1997)『創られた伝統』前川啓
治/他〔訳〕紀伊国屋書店
- 譚璐美/劉傑(2008)『新華僑 老華僑——変容する日本の中国人社会』文芸新書
- ジョン・キョンファ(1996)『きょうもおいしかったね。——キョンファさんちの朝鮮の
味、家庭の味130』株式会社 主婦と生活社
- 雑誌「イオ」2009年2月号 朝鮮新報社
- 岩崎久美子(2007)『在外日本人のナショナル・アイデンティティ——国際化社会にお
ける「個」とは何か』明石書店
- 森仁志(2008)『境界の民族史——多民族社会ハワイにおけるジャパニーズのエスニシ
ティ』明石書店
- 梶田孝道〔編著〕(2001)『国際化とアイデンティティ』ミネルヴァ書房
- 過放(1999)『在日華僑のアイデンティティの変容——華僑の多元的共生』東信堂
- ステファン・コルキュフ(2008)『台湾蓋外省人の現在——変容する国家とそのアイデ
ンティティ』上水流久彦/西村一之〔訳〕風響社
- 金命貞(2007)『多文化共生教育とアイデンティティ』明石書店
- 高全恵星「監修」/柏崎千佳子〔訳〕(2007)『ディアスポラとしてのコリアン——北
米・東アジア・中央アジア』新幹社
- 小熊英二/姜尚中〔編〕(2008)『在日1世の記憶』集英社新書
- 金股鉄1998「故郷——在中朝鮮人の3世」『ほるもん文化8、在日朝鮮人「ふるさと」
考』136~139 新幹社
- 黒龍江新聞電子版(中国)2009年7月17日
- 『人権と生活』2007年24号 在日本朝鮮人権協会
- 雑誌『イオ』2005年4月号 朝鮮新報社
- トーマス・H・エリクセン(2006)『エスニシティとナショナリズム』明石ライブラリ
ー94 鈴木清史〔訳〕明石書店
- 河原俊昭/他〔編著〕(2007)『外国人住民への言語サービス——地域社会・自治体は多
言語社会をどう迎えるか』明石書店
- ソシユール(1993)『一般言語学講義』小林英夫〔訳〕岩波新書

* 本稿出現順